

天平十三年(七四一年)能登国が越中国の一部であった時代、越中国の一宮は現在の気多大社であった。

気多大社が中央の文献に初めて見えるのは『万葉集』である。天平二十年(七四八)、越中守大伴家持が出家のため能登を巡行したとき、まず本社に参詣して、「之乎路から直超え来れば羽咋の海朝風ぎしたり船楫もがも」と詠んだ。本社がいかに重んじられ、のちに能登の一の宮となる神威を當時すでに有していたことがわかる。北陸の一角にありながら朝廷の尊崇が厚く、神護景雲二年(七六八)に封戸二十戸と田二町を寄せられ、しばしば奉幣を受けた。斉衡二年(八五五)には神宮寺に常住僧が置かれ、神階も累進して貞観元年(八五九)には正二位勳一等から従一位にのぼっている。このような国家の厚遇は、東北経営、あるいは新羅や渤海を中心とした対外関係とも無縁ではあるまい。能登半島の要衝に鎮座する気多大社の神威が中央国家に及んでいたのである。近年、南方八〇〇メートルの地に発見された寺家遺跡は縄文前期から中世にわたり、大規模な祭祀関係の出土品や遺構類は気多大社とのかかわりあいをしてのぼせる有力な資料となっている。

延喜の制では名神大社に列して祈年の国幣にあずかった。「神名帳」によれば、気多神社と称するものが但島、能登、越中、越後(居多神社と称する)にあるほか、加賀には気多御子神社があり、国史見在社として越前に気多神社がある。日本海沿岸にひろく気多の神が祭られていたことを知ることができ、古代における気多大社の神威がしのばれる。

建保五年(一一一七)將軍源実朝が公田として十一町余を寄進したが、古代の封戸などによる神領であったろう。中世末期には、九百八十俵と五十六貫余の社領を有していた。能登の守護島山氏の社領の寄進、社殿の造営などが見られる。今も遺る撰社若宮神社(国指定重要文化財)は島山氏の再建で、石川県の中世建造物として重視される。

近世は、前田利家をはじめ歴代の藩主が崇敬し、社領三百五十石を寄進したほか、祈願、祈祷はもとよりしばしば社殿の造営をした。本殿(大己貴命)、拜殿、神門、撰社若宮神社(事代主命)、撰社白山神社(以上国指定重要文化財)、神庫、隨身門(ともに県指定文化財)がそれである。加賀藩の保護した社叢(国指定天然記念物)には奥宮(素戔嗚尊・櫛稲田姫命)スサノオは、息子の五十猛神と共に土船で東に渡り出雲国斐伊川上の鳥上の峰へ到った後八岐大蛇を退治した。そのとき五十猛神が天から持ち帰った木々の種を、大八洲(おおやしま、本州のこと)に植えたので、大八州は山の地になったと言う。)が鎮座し、「入らずの森」(昭和五十八年五月二十二日、全国植樹祭に御来県の昭和天皇が本社に行幸された。入らずの森にお踏み入りになり御製をお詠みになりました。「斧入らぬみやしろの森めづらかにからたちばなの生ふるを見たり」決してみだりに採取などあそばさない。それぞれの植物が、平穏に生存をつづけ、その場所の植物相がいつまでも変わらないようにお祈りになっているからである。「斧入らぬみやしろの森」は、そのところのおよるこびなのである。)と呼ばれる聖域となっている。明治四年(一八七二)に国幣中社、大正四年(一九一五)には国幣大社となり、現在も北陸道屈指の大社として知られる。神社の生命は祭祀にある。元和五年(一六一九)の由来書には、七十四度の神秘的な祭祀を執行するとある。神仏習合時代には修正会、仏生講会、放生会、法華八講会なども行った。明治の神仏分離と新しい神社制度によって祭祀行事は大きく改革されたが、なおよく古儀を伝えた特殊神事が少なくない。そのなかで、最も規模が大きく、明るく開放的な平国祭と、類例のない神秘的な深夜の鶴祭りとりあげてみたい。

平国祭
石川県七尾市の所口にある気多本宮へ渡御する大規模な神幸祭で、現在は三月十八日から二十三日まで、羽咋・鹿島郡内の二市五町を巡る。神輿の長い行列が早春の能登路を巡行し、一般には「おいで祭り」と呼ばれる。沿道には人々が集まり、神幸を迎える。「寒さも気多のおいでまで」といわれ、神が民衆の中においでになり一体となる能登の春祭りとして親しまれている。

注目したいのは、往路の二十一日、鹿西町金丸の宿那彦神像石神社に一泊し、翌日同社の少彦名命が神輿に同座して七尾の気多本宮に赴き、一泊して祭典を営んでから帰途につくことである。気多大社の大國主神が少彦名命とともに能登を平定した往時をしのぶ行事だといわれている。

帰社した神輿は四月三日の例大祭まで拜殿に安置され、平国祭がそれまで連続していと伝える。例大祭には境内で蛇の目的を神職が弓で射、槍で突き、太刀で刺す行事があり、祭神が邑知瀉にすむ毒蛇を退治した状況を模したものだと言われているが、古記録にあれば、流鏑馬神事が歩射となったものであることが知られる。昭和六十三年からはその流鏑馬神事が四百五十年ぶりに復活され、古式に従って執り行われた。平国祭は気多大社鎮祭の由来を伝える重儀で、祭祀の性質としては祈年祭に属する。まことに大規模な渡御祭として全国的にも注目される。

鶴祭(重要無形民俗文化財)

十二月十六日未明の神事である。これより前、遠く七尾市の鶴浦町で生け捕った一羽の鶴を、同地の鶴捕部三人が鶴籠に入れ、二泊三日の道中をして十四日の夕方ごろ神社に到着し、鶴は餌止めとなる。鶴は生け捕られた瞬間から神となり、鶴様と呼ばれ、道中では民衆が「鶴様を拝まらずに新年は迎えられん」と手を合わす。

十六日午前三時すぎ神社で祭典があり、祝詞奉上、撒饌がすむと、本殿内の灯火だけを残して消灯し、西辺は暗黒となる。鶴捕部が鶴籠を本殿前方に運び、神職との間に問答がかわされる。やがて、「鶴籠を静かにおろし、籠をとりすて、鶴をその所に放てと宣り給う」とおごそかにいわれると、鶴捕部は鶴籠の鶴を本殿に向かつて放つ。鶴は本殿の灯火をしたって昇り、殿内の台にとまると取り押え、海浜に運ばれて放たれる。鶴は闇空に飛びたち、行くえも知れず消え失せるのである。

鶴祭りの由来は明らかでない。神社の所伝によれば、祭神の大國主神が神代の昔、初めて七尾市鶴浦町の鹿渡島に到着したとき、同地の御門主比古神が鶴を捕らえて捧げた故事によるとか、あるいは同地の櫛八玉神が鶴に化して海中の魚を捕って献上した故事にもとづくと言われている。神秘的な行事ではあるが、気多大社の年中祭祀上から大観すると、新嘗祭(十一月二十三日)中の神事だったのである。平国祭から例大祭(四月三日)に連なる行事が、祈年祭(二月十七日)の性格を有するのとは対比して考えるべきであろう。

なおお当夜、鶴の神前への進み具合によって年の吉凶を占う習俗が古くからあった。加賀藩祖の前田利家公は、鶴祭りの行事を重んじ、天正十三年(一五八五)に鶴捕部へ鶴田二反を寄進しているほどであるが、鶴祭りの鶴が例年にまさって神前によく進んだことを聞き、「国家之吉事、不可過之候」と喜んだ書状が大社にある。この神事を脚色した能の「鶴祭」があり、もっぱら金春流で行われたことは注目すべきことである。

氣多のまつり 一年を通して、様々な神事が行なわれています。

一月	元旦祭(一日)	七月	月次祭(一日)
	門出式(十一日)		ついたち結び(一日)
	奥津島神社例祭(十一日)	八月	月次祭(一日)
二月	月次祭(一日)		心むすび大祭(十三・十四日)
	ついたち結び(一日)	九月	月次祭(一日)
	紀元祭(十一日)		ついたち結び(一日)
	祈年祭(十七日)	白山神社例祭(一日)	
三月	菅原神社例祭(二十五日)	若宮神社月次祭(一日)	
	ついたち結び(一日)	御饗祭(一日)	
四月	月次祭(一日)	十月	月次祭(一日)
	ついたち結び(一日)		ついたち結び(一日)
	楊田神社例祭(三日)	神宮祭(十七日)	
	平国祭(十七・二十三日)	若宮神社例祭(二十日)	
五月	月次祭(一日)	十一月	月次祭(一日)
	ついたち結び(一日)		ついたち結び(一日)
	例大祭(三日)	七五三参り(一〇・三十日)	
	鎮花祭(四日)	新嘗祭(二十三日)	
	太玉神社例祭(四日)	印鑰社例祭(三十日)	
六月	月次祭(一日)	十二月	月次祭(一日)
	ついたち結び(一日)		ついたち結び(一日)
	御饗祭(一日)		鶴祭(十六日)
	白山神社例祭(一日)		清殿祭(二十日)
	若宮神社月次祭(一日)		氣の葉祭(二十九・三十・三十一日)
	大祓式(三十日)		大祓式(三十一日)
			奥宮例祭(三十一日)
			大多毘社例祭(三十一日)
			除夜祭(三十一日)